

101 明治12年5月7日 菊池長閑宛

第七号 明十二
五月七日 (長閑注記1)

第三号 (三月廿八日附四月十一日横浜出) 今日達す第一号未た
請取られぬ由彼号ハ那珂先生エ之書状に封入差出たり牛込エ当
たれハ那珂先生転宅セぬに於てハ晩く早く届へし此度河上より
の文通にて同人今月初旬英国に向出帆之由扱々多年の志願叶ひ
其悦如何計かと被察私に於ても実に嬉敷事なり然し大事の文通
家を失ひ東京大学校并其外の新聞を得るに由なく是にハ少し込

〔抹消〕る次第同氏ロンドン府着後ハ毎週の船便りあれハ此迄より

ハ文通も多かるへしと夫而已喜居なり当地より英国迄ハ僅十日の舟行なり只太平洋とハ違ひ大西洋ハ殊の外荒海なり同人留主中ハ其友人田中稻城なる人カ諸事取計ひ呉る様頼置由なれハ通例の文通の外何カ頼れ度事あらは右田中君迄仰越されたし此度書翰袋送り上るなれハ同人の世話を經す共書状の遅配ハ差丈なく参るへし当地ハ今月に成て始て春氣色を催し草も生出し樹葉も著れ出たり最来月ハ夏氣候となるへく春氣候の短事盛岡杯よりハ〔抹消〕甚し所謂梅桜桃李一時開く氣候なり

尊父君

武夫拜

〔長閑注記1〕

「六月十三日達シ日数三十八ヶ日

同月十九日此方第六号ヲ以返書」

〔長閑注記2〕

「書翰袋二十紙達ス」